

## ソローの詩

六川 信

## Some Poems of Henry David Thoreau

Makoto ROKUGAWA

The general evaluation of Henry David Thoreau in American literature is that he is a transcendentalist, a natural philosopher, and one of the distinguished prose writers. As a matter of fact, many of his prose sentences sound like poetry. Consequently, it is possible to say that Thoreau is a poetic writer.

Thoreau's primary concern at the commencement of his career as a writer was the study of the metaphysical poets such as George Herbert and Henry Vaughan and the creation of his own poetry, one example of which is "Sic Vita." The peak of his poetic imagination was around 1841, even though his best poems called "Orphics" were created in 1843. After the peak, his position as a writer gradually changed from poetry to prose.

Thoreau created more than two hundred poems in his youth. During his life, his poems were never ignored, nor always esteemed. However, by the turn of the century, in inverse proportion to his fame as an author of *Walden*, Thoreau the poet was forgotten and since then scant attention has been paid to his poems.

The purpose of this paper is to make a choice of some of Thoreau's noteworthy poems, to translate them into Japanese, and to disclose their poetic excellence.

アメリカ・ルネサンスの代表的散文作家として知られる超越主義者 Henry David Thoreau (12 July 1817—6 May 1862) は、一流の超越主義詩人を目指して作家修業の第一歩を踏み出した。彼の *Journal* は1837年10月22日から1861年11月3日までの生涯に亘るものであるが、1838年から1841年頃に至っては自作の詩や詩に関する記述で埋まっていて、若きソローがいかに詩作に情熱を燃やしていたかを如実に物語っている。

ソローの詩魂は20歳代前半に花開き、イマジネーションは湧き出するほどであった。しかし、1841年秋頃を頂点として衰えをみせる<sup>(1)</sup>。1842年から1843年に創作された詩も多いが、詩作は急に下降線をたどっていく。ソローの詩才を認めていた Ralph Waldo Emerson の変貌や Sarah Margaret Fuller との人間関係がその原因である、と Walter Harding は述べている<sup>(2)</sup>。ソローは1850年から1862年の12年間に、25の詩を書いたにすぎない<sup>(3)</sup>。生涯で200以上の詩を産み出したソローは、その90%を1850年以前に、換言すれば、そのほとんどを20歳代に創作した<sup>(4)</sup>。その後ソローは詩人から散文作家への道を歩み、"Natural History of Massachusetts" (1842), "A Walk to Wachusett" (1843), "A Winter Walk" (1843) を発表

---

一般科 教授

原稿受付 平成5年9月30日

し、1845年には *A Week* にとりかかり、1846年から47年にかけては現行の *Walden* の第一稿を仕上げる。そして、詩的散文作家としての傑作 *Walden* (1854) を誕生させる。

生前は、ソローの詩が完全に無視されることはなかったが、*Walden* の作家としての名声が高まるにつれて、詩人ソローは忘れられていった。1895年に Sanborn と Salt が *Poems of Nature* を編んだとき、49の詩が収められたにすぎない<sup>(6)</sup>。1943年に Carl Bode は *Collected Poems of Henry Thoreau* を出版し198の詩を取めた。1964年の Enlarged Edition では、13の詩が追加され、211の詩が収められ、ソローの詩研究の定本となっている。この詩集が玉石混淆であるのは、編集者 Carl Bode が、詩の価値というよりも、荒削りの草稿の詩をも含めて、ソローの詩のテキストの作成に主眼をおいたからである。

本稿の目的は、Orphics をはじめとするいくつかの詩を取り上げ、邦訳を試み、考察を加えることにある。

## 1

ソローの詩に接するとき、我々はまず、彼の詩観を一瞥しておく必要がある。彼は poetry や poet ということばを、通常の意味で捉えていないからである。彼は自分の詩論を系統だてて論じ一書にまとめることはしなかった。 *Journal* や作品の中で信念を吐露している。1838年作の “The Cliffs and Springs” や “The Bluebirds” をみると、伝統的詩形式はほとんど無視して、インスピレーションの湧き出ずるのに沿って、恍惚の感情をはき出して詩作をしているように思われる。ところが、1840年7月1日の *Journal* ですでに、“There is always a poem not printed on paper……”と述べ、1841年8月28日の *Journal* では “True verses are not counted on the poet’s fingers, but on his heart-strings.” と述べたあと My life has been the poem I would have writ, But I could not both live and live to utter it. という2行連句を書き入れている。詩は文字で書かれないこともあると述べるとき、彼は通常の詩の意味から逸脱していく。

この *Journal* の記述は、*A Week* (1849) の “Friday” の章に組み込まれ、“The true poem is not that which the public read. There is always a poem not printed on paper, coincident with the production of this, stereotyped in the poet’s life. It is what he has become through his work.”<sup>(6)</sup> となり、poem ということばに対する彼独特の解釈がなされる。詩人が自分の創作した詩を通してどのように生きたか、それが詩である、というのである。彼にとって、文字で詩を書くことよりも、人生を詩的に生きることが最優先事項なのである。この信念を、先の引用の文に続けて、凝縮して次の couplet でしめくくるのである。この対句の manuscript (本稿で以下 MS と書く) は、Middlebury College の Starr Library と Harvard University の Houghton Library が所蔵している。

My life has been the poem I would have writ,  
But I could not both live and utter it. (CP. 85)<sup>(7)</sup>

私の人生は私が書こうとした一篇の詩であった。  
だが、生きることが精一杯で、人生を詩に歌い上げることができなかった<sup>(8)</sup>。

これは、24歳のソローの告白である。思うほどの詩作は実現できず、詩人としては失敗であった、というのである。このテーマは、“I am the Autumnal Sun” (CP. 80) や、後に論じる“Sic Vita” (“I am a parcel of vain strivings tied”) (CP. 81) でも、また、“The Poet’s Delay” (CP. 78)) でも扱われている。

## 2

ソローには、Simonidian Poems 或は Orphics と呼ばれる 4 つの詩がある。“Smoke” (“Light-winged Smoke, Icarian bird”), “Mist” (“Low-anchored cloud”), “Haze” (“Woof of the sun, ethereal gauze”), “Fog” (“Dull-water spirit—and Protean god”) がそれぞれである。このそれぞれが、超越主義者の詩の中では、最高の詩にランクされるものである。ソローは独自の詩的音楽の響きをここに創造したのである<sup>(9)</sup>。ギリシャの最初の偉大な叙情詩人 Simonides の簡潔で力強い詩に似ている、と評したのはエマスンであった<sup>(10)</sup>。また、ストレスのリズムに乗った美しく甘美な滑らかな調べのこの詩は、ギリシャ伝説の Orpheus の音楽の魅力にも優ると考えた Ethel Seybold は、*The Dial* に発表された時の “Orphics” という語を用いてこのソローの詩を讃えている<sup>(11)</sup>。

先ず、“Mist” (“Low-anchored cloud”) から検討する。この詩は *A Week* の “Tuesday” の章に収められている。1843年4月の創作であり、それぞれ異なった MS を Henry E. Huntington Library, San Marino, California; Alderman Library, University of Virginia, Charlottesville; Pierpont Morgan Library, New York, New York が所蔵している<sup>(12)</sup>。ソローの詩は三流であり、散文の中に投げ入れられた断片にすぎない、という批評がある。確かに、荒削りで詩的価値の劣るものもあるが、彼の詩は独立した価値をそなえていると共に、散文と有機的に融合し、その散文が詩の導入部となっていることが多い。その好例として、“Mist” の直前の文を掲げる。“We passed a canal boat before sunrise, groping its way to the seaboard, and though we could not see it on account of the fog, … The fog, as it required more skill in the steering, enhanced the interest of our early voyage, … A slight mist, through which objects are faintly visible, has the effect of expanding even ordinary streams, by a singular mirage, into arms of the sea or inland lakes. …”<sup>(13)</sup> この “mist” は次の詩へと流れていく。

Low-anchored cloud,  
Newfoundland air,  
Fountain-head and source of rivers,  
Dew-cloth, dream drapery,  
And napkin spread by fays;  
Drifting meadow of the air,  
Where bloom the daisied banks and violets,  
And in whose fenny labyrinth  
The bittern booms and heron wades;

Spirit of lakes and seas and rivers,  
 Bear only perfumes and the scent  
 Of healing herbs to just men's fields! (CP. 56)

係留され 低くたれこめた雲  
 ニューファンドランドの空  
 泉の根源 川の水源  
 露の布、夢の飾り布  
 妖精が広げたナプキン。  
 漂える大気の牧場  
 その土手にヒナギクとスマイレが咲き  
 その沼沢の迷宮では  
 サンカノゴイが鳴き サギが歩く。  
 湖と海と川の精霊よ  
 義しき人の畑に  
 病を癒やす薬草の芳香のみを送れ。

詩はイメージの総体と考えたソローは、“mist”の絵画的描写を1行から9行まで続け、イメージを重ねていく。科学者の目で見るとは異なる。詩人の心眼で自然をみつめる。mist, fog, hazeは彼の好む題材だ。具体物を描きそこからイメージを引き出すのに、これらは現実から異質な幻想の世界へと導き易いからであろう。dream draperyとかnapkin spread by faysは実に幻想的表現である。最後に命令文を入れ祈りをこめる手法は、“Orphics”に共通している。この“Mist”と酷似したイメージの詩が“Fog” (“Dull water spirit—and Protean god”)である。

Dull water spirit—and Protean god  
 Descended cloud fast anchored to the earth  
 That drawest too much air for shallow coasts  
 Thou ocean branch that flowest to the sun  
 Incense of earth, perfumed with flowers—  
 Spirit of lakes and rivers, seas and rills  
 Come to revisit now thy native scenes  
 Night thoughts of earth—dream drapery  
 Dew cloth and fairy napkin  
 Thou wind-blown meadow of the air. (CP. 150)

動きののろい水の精霊——プロテウスのような神  
 低くたれこめ大地に固くつながれた雲  
 浅瀬に過剰な空気を引きよせる

太陽に向けて流れる大海原の支流  
 花の香りに満ちた大地の芳香——  
 湖と川，海と小川の精霊よ  
 君たちのふるさとの 風景を見にきてくれ  
 大地の夜の想い——夢の飾り布  
 露の布，妖精のナプキン  
 風すさぶ大気の牧場。

この詩のMSはHenry E. Huntington Libraryが所蔵する。創作年月日は1843年4月11日とされていた<sup>(14)</sup>。しかし、1843年1月16日の*Journal*に同一の詩が入っている<sup>(15)</sup>。とすれば、1月の作と考えられる。我々は、“Mist”と“Fog”にある共通のことばに気付く。dream draperyとDew clothは全く同一であり、napkin spread by faysとfairy napkinそしてperfumes and the scentとincense of earth, perfumed with flowersのイメージの類似性。更に、cloud, air, lakes, seas, rivers, Spiritという同一語の使用が類似した詩的雰囲気醸成する。“Mist”は“Fog”の異稿ではないのか、と感じられる。“Fog”では、drawest, Thou, flowest, thyという語のもつ古風な響きが、この詩の音調に緊張感を与えているのは事実である。

“Haze” (“Woof of the sun, ethereal gauze”)は、“Orphics II”として、“Orphics I”の“Smoke”と共に、1843年4月に*The Dial*に発表された。このとき、“Haze”は*New York Tribune*で高い評価をえた<sup>(16)</sup>。“Mist”と同じく、*A Week*の“Tuesday”の章に収められている。“Mist”の導入部が見事であるように、“Haze”の直前の文も適切である。“The haze, the sun’s dust of travel, had a lethean influence on the land and its inhabitants, and all creatures, resigned themselves to float upon the inappreciable tides of nature.”<sup>(17)</sup> (下線部筆者)

Woof of the sun, ethereal gauze,  
 Woven of Nature’s richest stuffs.  
 Visible heat, air-water, and dry sea,  
 Last conquest of the eye;  
 Toil of the day displayed, sun-dust,  
 Aerial surf upon the shores of earth,  
 Ethereal estuary, frith of light,  
 Breakers of air, billows of heat,  
 Fine summer spray on inland seas;  
 Bird of the sun, transparent-winged  
 Owlet of noon, soft-pinioned,  
 From heath or stubble rising without song;  
 Establish thy serenity o’er the fields. (CP. 59.)

自然の最高級の素材で織られた  
 太陽の緯糸、薄いもや、  
 目に見える熱、空気の水、乾いた海、  
 遠くまで見すえても とらえがたきもの。  
 その日の網が広がる 太陽のちり、  
 大地の岸辺によせる空気のような波しぶき、  
 天上の河口、光の入江  
 空気の波浪、熱の大波  
 内陸の海にかかる細かな夏の水煙。  
 透明な翼の 太陽の鳥  
 翼柔らかな 真昼のフクロウよ、  
 荒野か刈株から 歌もなく立ち上がり、  
 野辺に のどけさを もたらしてくれ。

ソローは、自らが好む air, water ということばを重ねて自由にイメージをふくらませていく。Haze は visible heat で air-water で dry sea だと歌う。この表現には非常な飛躍があるかに思われるが、それは論理の世界で考えるからであり、詩人の感性の世界ではこのようなインスピレーションを受けるのである。ソローは Haze を鳥にたとえて、“serenity”をもちたらしめてくれと歌い上げる。象徴的で簡潔な形式に思いを盛りこむこの方式は、ソローが、ギリシャの詩人 Orpheus から学んだものなのである<sup>(18)</sup>。

## 3

ソローの処女作 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) の扉は3つの詩で飾られている。作品の初めが詩であるとき、その詩は作品の象徴的意味をもつ、と考えられる。先ず、この作品の製作の由来に触れなければならない。

ソローは兄 John と2週間の舟旅を楽しんだ。1839年8月31日の朝、Assabet川と Sudbury川が合流し Concord川となる地点から Sudbury川を少し上った岸辺から、2人は手造りの舟で友人の見送る中、快晴に恵まれて出発した。コンコード川から Merrimack川に入り、New Hampshire州の Hooksettへ上り、さらに同州のコンコードまで徒歩でいき、そこから馬車で Plymouthへ出て、The White Mountainsの最高峰 Mount Washingtonの登頂を果たした。出発から10日目であった。故郷のコンコード村へ帰ったのは9月13日であった<sup>(19)</sup>。

1842年1月11日、最愛の兄 John が破傷風で急死した。その年の秋、ソローは兄への追悼の書の奉獻を思いつく。1845年7月4日、Walden湖畔での2年2ヵ月の独居生活に赴いた理由の1つは、この鎮魂の書の執筆にあった。2週間の旅が1週間の旅行記にまとめられ、1849年に *A Week* として出版された。

最初の詩 “Where'er thou sail'st who sailed with me” は、1842年1月以降に詩想はあったとしても、1842年の秋以降の作詩であろう。 *Journal* に書かれたのがその頃である<sup>(20)</sup>。MS は Pierpont Morgan Library が所蔵する。

Where'er thou sail'st who sailed with me,  
 Though now thou climbest loftier mounts,  
 And fairer rivers dost ascend,  
 Be thou my Muse, my Brother— (CP. 29)

我と舟旅をせし君は はずこを旅するにかあらん、  
 君今高き山に登り、  
 美しき川をさかのぼれども、  
 兄よ、我の詩神になり給え—。

この詩は亡き兄を偲ぶ。従って、*A Week* は兄に捧げる書であることを暗示する。Muse は大文字であり神にまで高められている。Brother も大文字でありソローの心の中に存在する理想像である。最後の行は祈りとなっている。ダッシュが余韻となって響き神聖さを導き出す。

2番目の詩 “I am bound, I am bound, for a distant shore” は超越主義者ソローを浮き彫りにして、*A Week* が超越主義の書であることを暗示する<sup>(21)</sup>。この詩は1845年3月以降の作と思われる。MS は、Pierpont Morgan Library が所蔵する。

I am bound, I am bound, for a distant shore,  
 By a lonely isle, by a far Azore,  
 There it is, there it is, the treasure I seek,  
 On the barren sands of a desolate creek. (CP. 30)

我は行く、我は行く、遠い彼方の岸辺へ、  
 孤独なる島、はるかなるアゾレス島、  
 かの地に かの地に 我の求める宝が、  
 わびしき小川の 不毛の砂地の上に。

最後の詩 “I sailed up a river with a pleasant wind” で再び兄への思慕がうたわれる。と同時に、兄 John を指す THOU は神の観念とも重なってきて、7行目は超越主義者ソローの言う “everlasting Something”<sup>(22)</sup> を暗示する。

I sailed up a river with a pleasant wind,  
 New lands, new people, and new thoughts to find;  
 Many fair reaches and headlands appeared,  
 And many dangers were there to be feared;  
 But when I remember where I have been,  
 And the fair landscapes that I have seen,

THOU seemest the only permanent shore,  
The cape never rounded, nor wandered o'er. (CP. 31)

新しき 土地，人々，考えを見出んと，  
心地よき風をうけて，舟旅をせり。  
幾多の美しき入江と岬が現われ，  
未だ知らぬ危険の 多かりしこと。  
旅の土地，その美しき風景を  
いま 心に想い描けば，  
永却に変わらぬ岸边こそ 君の姿，  
もはや 岬を廻り 岬の上をさすろうことも なかりけり。

## 4

エッセイ “A Winter Walk” には、2つの詩が組みこまれている。その1つが、“When Winter fringes every bough”である。この詩の原型は“Fair-Haven”というタイトルで、1838年12月15日の *Journal* に入っている<sup>(23)</sup>。ソローはこの詩をエッセイに入れるに際し、10数箇所の表現を改め、11連の最後の1連を削除し、10連とした。MSは、Pierpont Morgan Library と Starr Library が所蔵する。

“A Winter Walk” は、1843年の春、ソローがエマソンの兄で Staten Island 居住の William Emerson の子供の家庭教師に招かれ同家に滞在中に執筆され、同年10月にエマソンの編集になる *The Dial* に発表された。エマソンは、この2つの詩の削除を要求したという<sup>(24)</sup>。散文にそれほど融合していないと考えたのだろうか。

“A Winter Walk” には、“Winter” という語が19回、“summer” という語が26回使われている。冬が語られる一方で、夏が提示され、冬と夏がこの作品の構造の糸になっている。この視点でこの詩を読むと、詩と散文の融合に我々は気付く。第1連の the leaves beneath は春の到来を告げ、第3連で the summer still is nigh, 第4連で The snow in summer's canopy, 第5連で The north wind sighs a summer breeze と夏のイメージが重なっていく。第7連で The restless ice doth crack と春のイメージが来て、第8連で自然の美が歌い上げられる。最後に、自然と1つに駆け合った詩人は、春と夏の明るいイメージを用いて、自然の美と霊を歌い上げるのである。自然との合一を目指した超越主義者ソローがここにある。拙訳のみを掲げる。

どの枝もみな 冬が  
その怪奇な花輪で縁どり  
下の葉に  
沈黙の封印をするとき、

じっと耳をそば立ておると  
冬を恐るるにおよばない  
うらかな 永遠の喜びの便りを  
北風が運んでくる。

花輪のすそのいく筋もの水が  
 ごぼごぼと流れ  
 地下道では ねずみが  
 草原の枯草をかじるとき、

外の静かなる池では 即座に  
 ゆるんだ氷が砕け  
 池の妖精が たのしくはね回る  
 耳をつんざく破碎の音の中で。

思うに 夏は常に近くにありて  
 地下に潜む  
 去年の荒野に あの同じ野ねずみが  
 心地よく 眠りをむさぼりおるから。

ぼくは 一心に谷へと急ぐ  
 まるで 晴れやかな知らせを聞いたかの如く  
 自然がどんな大祭を開いたか  
 その美を 見逃すことはできぬ。

もし 偶然に チカディーが  
 やがて かすかな調べを歌うと  
 雪は 夏が自らまとった  
 夏の天蓋。

ぼくは 隣りの氷とたわむれ  
 氷の震えに 同情する  
 新たな裂け目は たちまちに  
 喜びの湖を 横切って進むから。

美しき花が 生気みなぎる樹木を飾り  
 目もくらむ まぶしき果実が ゆれ  
 北風は 夏の微風を吹きそそぐ  
 凍えさす霜を 防ぐため (右の欄へ)

地中のコホロギと  
 暖炉の薪束と 一つに融け合い  
 森の小径に  
 なつかしくもめずらしき音が 響きわたる。

(CP, 14)

## 5

ソローの葬儀に際し、ソローが “the best-natured man I ever met”<sup>(25)</sup> と呼んだ Amos Bronson Alcott は、“Sic Vita”を朗読した。これは、1839年頃までのソローの詩の中では、最も成功した有名な詩である。Sic も Vita もラテン語で、それぞれ “thus, in this way” と “a life, course of life, way of life” を意味するから、“Sic Vita” は「人生はこのようなもの」と訳されている。1841年7月 *The Dial* に掲載され、*A Week* の終章 “Friday” の章に収められた。MS は Houghton Library が所蔵する。*A Week* の校正刷りの MS は Starr Library の所蔵である。我々は、よく知られたこの詩を再考することとする。

“Sic Vita” は、形而上詩人、中でも、国会議員でありかつ詩人でもあった George Herbert (1593-1633) の影響を受けているとの指摘は、多くの批評家によってなされてきた。Mark Van Doren は、Herbert の詩 “Employment” と “Daniel” とを例示し、“Sic Vita” との類似を指摘した<sup>(26)</sup>。Carl Bode は Herbert の “The Flower” との類似を説き<sup>(27)</sup>、Welch Donovan は “Sic Vita” と “The Flower” を並置して類似性を論じた<sup>(28)</sup>。F. O. Matthiessen は Herbert とその弟子 Henry Vaughan (1622-1695) との類似を指摘した<sup>(29)</sup>。Henry Seidel Canby や Henry W. Wells も同様な論を展開している。<sup>(30)</sup> 我々も、“Sic Vita” には、ソローの詩としては珍しく、精巧な秩序正しい形式があることに気付く。

ソローは、当時非常に流行していた花のイメージを用いて、形而上詩的に大胆に、自分は “I am a parcel of vain strivings” と宣言する。この宣言は、劇的であり、想像力豊かであ

り、「ウィット」のひらめきをもっている。だから、読者は急激な驚きにおそわれる。この花のメタファーは更に拡大していく。作者は自分を、“A bunch of violets without their roots”であり、“A nosegay which Time clutched from out Those fair Elysian fields”なのだ、と述べる。ソローの芸術的未熟さが述べられている、と解釈できるのではあるまいか。最後の2連で、“I was not plucked for naught”と言い切り“by another year, … More fruits and fairer flowers Will bear”と主張してはみるのだが、芸術家としては未完成であり、“I am a parcel of vain strivings tied By a chance bond together,”なのである。

さて、“Sic Vita”の創作年月については2説あり、1つは1837年とし、他は1841年とする。前者は、F. B. Sanbornの記述に基づいて伝記作家たちが継承してきたものである<sup>(31)</sup>。周知のことではあるが、1837年5月初旬、ソローがHarvard Collegeを卒業する1～2週間前、大学から数日間帰省していた折のことであった。エマソン第2夫人Lidianの姉Mrs. Lucy Jackson Brownが、夫が海外に出掛けていたので、当時、息子と娘の2人の子供をつれて、ソローの叔母の家に下宿していた。そのとき、ソロー自身もその家に住んでおり、すみれの花を摘み1束にしてわらで縛り、詩“Sic Vita”をそえて、その夫人の部屋の窓から投げ入れた、という話である。この話は、多くの伝記作家や批評家によって述べられてきた<sup>(32)</sup>。

Kenneth Walter Cameronもこの説をとっている。但し、Sanbornの説をくり返してはいない。1837年春、ハーヴァード大学の文学雑誌HARVARDIANAに“Sic Vita”が投稿されたが没になった事実がある、と報告している<sup>(33)</sup>。

1841年説を主張するのは、Elizabeth Hall Witherellである。彼女はCameron説に反論する。HARVERDIANAに投稿された“Sic Vita”の作者の確認がない、と説明する。また、もしこれがソローの作品だとしても、それは“Sic Vita”ではなく、“Life is a Summer Day”である可能性が強い、と主張する。何故なら、“Life is a Summer Day”のMSの上に、先ずSic Vitaと書き、ソローはそれを消しているからである、と論じる。Perry Millerの編集した*Consciousness in Concord*には、“Sic Vita” — in the Dial. Saturday Jan. 16th 1841. と記載されているだけである<sup>(34)</sup>。“Sic Vita”がThe Dialに掲載されたのは、1841年7月1日であった。ソローが“Sic Vita”を書いたのは、1841年1月16日から同年7月までの間である。筆跡も1840年のものに似ている。Witherellはそう主張する<sup>(35)</sup>。

ソローの詩の本領は、無駄なことばを省き、表現を簡潔にし、自然の具体的事象を描きながら、そこに止まることなく、的確な比喩によってイメージを拡大させ、自己と自然或は宇宙との融け合う境地を、詩の中に浮き立たせて見せる点にある。“Orphics”は、この点で抜群であるが、中でも、Waldenの“House Warming”の章に埋めこまれた“Smoke” (“Light-winged Smoke, Icarian bird”)が最高の出来映えであろう。更に、“The Summer’s Rain”, “The Fisher’s Son”, “Thaw”等も検討しなければならない。

## 注

- (1) Elizabeth Hall Witherell, “The Poetry of Henry David Thoreau: A Selected Critical Edition,” unpubl. diss. (Ann Arbor: Xerox University Microfilms, 1979), p. 2.

- (2) Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau: A Biography* (Princeton: Princeton University Press, 1962, rpt. 1982), pp. 113-117.
- (3) "The Poetry of Henry David Thoreau: A Selected Critical Edition," p. 2.
- (4) William L. Howarth, *The Literary Manuscripts of Henry David Thoreau* (Ohio State University Press, 1974), p. 23.
- (5) Henry David Thoreau, *Poems of Nature*, ed. Henry S. Salt and F. B. Sanborn (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1895).
- (6) Henry David Thoreau, *The Writings of Henry D. Thoreau: A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, ed. Carl F. Hove, William L. Howarth and Elizabeth Hall Witherell (Princeton: Princeton University Press, 1980), p. 343.
- (7) Henry David Thoreau, *Collected Poems of Henry Thoreau*, Enlarged Edition, ed. Carl Bode (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1964, rpt. 1974), p. 85. 以下同書からの引用は ( ) に CP. と頁数で示す.
- (8) 邦訳について、次の文献を参照した。東山正芳『ヘンリー・ソローの生活と思想』(東京: 南雲堂, 1972), 木村晴子・島田太郎・斎藤光訳『H・D・ソロー』(東京: 研究社, 1977), 亀井俊介・川本皓嗣編『アメリカ名詩選』(東京: 岩波書店, 1993).
- (9) 拙稿, 「詩人ヘンリー・D・ソローの肖像」『長野工業高等専門学校紀要』第19号 (1988), pp. 158-160. "Smoke" は同稿159頁で論じた.
- (10) Ralph Waldo Emerson, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (New York: AMS Press, Inc., 1968), Vol. X, p. 476.
- (11) Ethel Seybold, *Thoreau: The Quest and the Classics* (New Haven: Yale University Press, 1951, rpt., Archon Books, 1969), p. 17.
- (12) 詩の創作年代及びMSの所蔵については, William L. Howarth, *The Literary Manuscripts of Henry David Thoreau* (Ohio State University Press, 1974). "The Poetry of Henry David Thoreau: A Selected Critical Edition". Donovan L. Welch, "A Chronological Study of the Poetry of Henry David Thoreau" unpubl. diss. (Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1967). による.
- (13) *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, p. 191.
- (14) *The Literary Manuscripts Of Henry David Thoreau*, p. 85. "A Chronological Study of the Poetry of Henry David Thoreau," p. 119.
- (15) Henry David Thoreau, *The Writings of Henry David Thoreau: Journal* Vol. I: 1837-1844, ed. Elizabeth Hall Witherell, William L. Howarth, Robert Sattlemeyer, Thomas Blanding (Princeton: Princeton University Press, 1981), p. 448.
- (16) Steven Fink, *Prophet in the Marketplace: Thoreau's Development As A Professional Writer* (Princeton: Princeton University Press, 1992), p. 87.
- (17) *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, p. 217.
- (18) Barbara Harrell, "An Orphic Hymn in Walden," *Emerson Society Quarterly: A Journal of the American Renaissance*, Vol. 20, 2nd Quarter, 1974, p. 125.
- (19) *The Days of Henry Thoreau: A Biography*, pp. 88-93.
- (20) *The Writings of Henry David Thoreau: Journal* Vol. II: 1842-1848, p. 3.
- (21) 拙稿「詩人ヘンリー・D・ソローの肖像」, p. 154.
- (22) *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, p. 173.
- (23) *Journal*, Vol. I, pp. 59-60.

- (24) *Thoreau's Vision : The Major Essays*, ed. Charles R. Anderson (Englewood Cliffs, N. J. Prentice-Hall, Inc., 1973), p. 33.
- (25) *Dictionary of Literary Biography*, Vol. I, *The American Renaissance in New England*, ed. Joel Myerson (Detroit : Gale Research Company, (1978), p. 3.
- (26) Mark Van Doren, *Henry David Thoreau : A Critical Study* (New York : Russell and Russell, 1916), pp. 103-108.
- (27) *Collected Poems of Henry Thoreau* : Enlarged Edition, p. 353.
- (28) "A Chronological Study of the Poetry of Henry David Thoreau," p. 23.
- (29) F. O. Matthiessen, *American Renaissance : Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York : Oxford University Press, 1941, rpt. 1968), p. 110.
- (30) Henry Seidel Canby, *Thoreau* (Boston : Houghton Mifflin Company, 1939), p. 73. Henry W. Wells, "An Evaluation of Thoreau's Poetry," *American Literature*, Vol. 16, XVI (May), 1944), p. 105.
- (31) F. B. Sanborn, *Henry D. Thoreau* (Boston : Houghton Mifflin and Company, 1882 : rpt. 1899), p. 60.
- (32) Henry Seidel Canby, *Thoreau*, p. 71. *Collected Poems of Henry Thoreau* : Enlarged Edition, p. 353. Richard Lebeaux, *Young Man Thoreau* (Amherst : University of Massachusetts Press, 1977), p. 63. Richard Bridgman, *Dark Thoreau* (London : University of Nebraska Press, 1982), p. 22. Raymond R. Borst, *The Thoreau Log : A Documentary Life of Henry David Thoreau 1817-1862* (New York : G. K. Hall and Company, 1992), p. 25.
- (33) Kenneth Walter Cameron, "Thoreau, "SIC VITA", And HARVARDIANA," *The Thoreau Society Bulletin* (Bulletin 49, Fall 1954).
- (34) Perry Miller, *Consciousness in Concord : The Text of Thoreau's Hitherto "Lost Journal" (1840-1841) Together with Notes and a Commentary* (Boston : Houghton Mifflin Company, 1958), p. 213.
- (35) "The Poetry of Henry David Thoreau ; A Selected Critical Edition," pp. 198-199.